

西大寺旧境内の調査

— 第594次

1 はじめに

本調査は、奈良市小坊町における倉庫の建設工事とともなう発掘調査である。南北3.0m、東西2.8mの調査区を設定し、8.4㎡を調査した(図270)。調査期間は11月6日から11月7日である。西大寺薬師金堂(平城第409・422次調査)の南西方、前庭部の位置にあたと想定され、本調査区北方の調査(市SD第29次調査)では、標高約75.0mで、奈良時代および室町時代の遺構が検出されていた。

2 基本層序

基本層序は、地表から碎石(約10cm)、真砂土(約10cm)、黒褐色土(約30cm)、灰褐色砂質土(床土か、遺物をわずかに含む、約10cm)、明黄褐色粘質土(地山)。遺構検出は、明黄褐色粘質土の上面(標高約75.1m)でおこなった(図271・272)。

3 検出遺構と出土遺物

土坑SK1141 調査区西部で検出した土坑。掘方は平面円形を呈し、南北約1.4m、東西は1.2m分を検出し、西端のみ一部未検出だが、ほぼ円形を呈する。深さは約0.3m。底部には、幅約1cmの竹を用いた径103cmの箍が据えられた状況で残存しており、桶を据えていたものとみられる。裏込土は、灰色砂質土混じりの明黄褐色粘質土である。埋立土は暗灰褐色砂質土で、瓦片や染付・瓦質焜炉・土釜・江戸時代後期の土師器皿などを含み、江戸時代後半に廃絶した様相を示す。後述する東西溝SD1142と重複し、これよりも新しい。

東西溝SD1142 調査区中央部で検出した素掘りの東西溝。幅約0.3m、深さ約0.1mで、東西約1.4m分を検出し、少なくとも調査区外の東方へ続く。検出した範囲では、底面の標高はほぼ水平である。埋土は灰色砂質土で、明確な流水の痕跡は認められない。奈良時代の平瓦片および古代の須恵器片を含み、中世以降の遺物は含まないことから、古代に遡る可能性がある。前述のSK1141よりも古く、後述のSK1143よりも新しい。

小穴SK1143 調査区東部で検出した小穴。東西約0.5

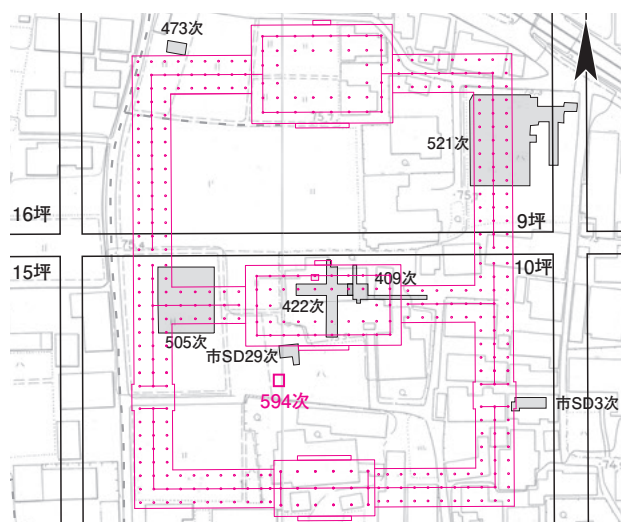


図270 第594次調査区位置図 1:2000



図271 第594次調査区全景(北西から)

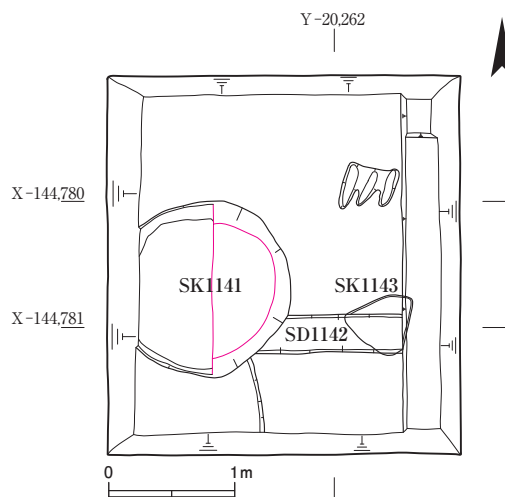


図272 第594次調査区遺構図 1:60

m、南北約0.5mの不整形平面を呈する。深さは0.1m以上。前述の東西溝SD1142と重複し、これよりも古い。

4 おわりに

本調査区では、古代に遡る可能性がある東西溝および小穴を確認したが、西大寺金堂院の前庭部の舗装などは、後世の削平によって失われたものと考えられる。一方、近世後期に廃絶した土坑の存在から、当該地域における近世以降の活動を知ることができた。(鈴木智大)